

○令和6年度の具体的な学校経営目標・計画
今年度の取組目標「よさを認め、一人一人が生き生きと学ぶ学校づくり」

| 学校経営目標 | 具体的計画 | 担当分掌 | 各分掌による具体的計画 | 今年度の達成内容・基準 ※達成基準をできるだけ数値化してください(できれば現状も) | 中間達成状況と評価 | | 最終達成状況と評価 | |
|---------|---|---|--|---|--|----|---|----|
| | | | | | 達成状況(9月30日現在) | 評価 | 達成状況※評価の根拠もできるだけお示しください。 | 評価 |
| 学習活動の充実 | ①日々の授業を大切に、授業の取り組み姿勢や学習習慣を定着させる。 ②ICTを効果的に活用した「わかる授業」を実践する。 ③SDGsやPBL、グローバルの視点から、主体的・対話的で深い学びにつなげる。 ④資格取得・検定や各種コンテスト等への取組を推進し、生徒の達成感・成就感を醸成する。 | 教務課 | ・課題研究を全ての科で同一同一時間に実施することで、科の連携が取りやすい学習環境をつくる。 ・電気科と連携して、電気科が実施しているPBLへの取り組みを校内で共有出来る体制をつくる。 | ・課題研究で連携した授業と内容を調査して、5科長会で共有する。 ・PBLへの授業参観を2回以上促す事ができた。 | ・課題研究では工業化学科と電子機械科、設備システム科、機械科と電気科の連携ができています。 ・PBLへの授業参観を1回促す事ができた。 | B | ・5科連携の、課題研究中間発表が実施できた。 ・PBLへの授業参観を2回促す事ができた。 (課題) 授業参観へ積極的に参加してもらえよう声がけ | A |
| | | OJT研修チーム | メンバー各自が授業実践の研究テーマを設定し、ICT活用を踏まえた学習意欲の維持向上につながる授業実践の研究や工夫を共有する。 | 年間8回程度の校内研修を行い、授業実践の工夫や効果的な教材・教具の開発などについて研究、協議をした内容を公開授業週間などで共有している。 | 中堅教諭の実践や研修おともに、校内研修の年間計画に従って授業実践の工夫や効果的な教材・教具の開発などについて研究、協議をしている。 | B | ICT活用を含めた実践的な授業研究や情報共有ができ、各自の研修テーマに沿って授業計画の中でより効果的な学習用具としてのICT活用を考え、相互参観などを通じて実践的な研究ができた。 | B |
| | | 情報管理部 | ICTが積極的に活用できるように環境整備と使用についての支援をする。 | ICT支援員と連携を取り、教員への研修と設備の更新を行う。 | 毎月二回、ICT支援員と連携を取りながら、校内ネットワークや機器の整備を行っている。本年度は大きなトラブルは発生していない。 | B | 毎月、ICT支援員や情報担当者や連携を取りながら、円滑なネットワークの運用や機器の整備を、年間を通して行うことが出来た。 来年度はさらに頻度を増やして、業務の見直しを進める。 | A |
| | | 資格推進部 | 専門科で取得できる資格の案内とサポートをする。 | 事前に学習や補習を行い、合格レベルに達する見込みがあれば受験をする。そのために、過去問題を閲覧できるように充実させる。 合格率国家資格50% 技能検定60%を目指す。 | 計算技術検定は昨年合格率86%から94%へ上昇している。JM申請状況は26名(G2S10B14)で昨年同期29名(G5S12B12)に対して申請数・内容共にはやや悪い。職業教育顕彰は12名(昨年13)とほぼ同じ。今後技能検定や溶接評価試験の結果が出るが、受験生徒数は昨年並みである。 | B | ジュニアマイスターや職業技術顕彰などの最終的な被顕彰者数は未定であるが、各種検定受験結果などはほぼ昨年度並みである。 | B |
| | | 国語 | 家庭学習による基本的な語彙の獲得と、それらを活用した表現力の育成を図る。ICTを効果的に活用し、生徒自らが課題を発見してその解決を図れるように授業展開を工夫する。 | 小テスト等では学習の定着状況を確認し、定期考査においては基礎的な語彙力・表現力を問う問題がほぼ全員解答できるようにしている。課題提出率が各クラス90%以上を目指す。 | 漢字・単語・SPI対策の小テストは各学年毎週必ず実施できている。定期考査においては、基礎的な語彙力を問う問題は96%の解答率であったが、表現力を問うものの解答率は70%にとどまった。作文・小論文・意見文についての苦手意識を払拭する更なる工夫が必要である。GW時などの課題提出率は85%であった。今後は個別指導によって提出率を伸ばす予定である。 | B | 漢字・単語・SPI対策の小テストは各学年毎週必ず実施できた。定期考査においては、基礎的な語彙力を問う問題は96%の解答率、表現力を問うものの解答率も80%に伸びた。自分の考えを周囲とシェアできる授業環境作りの効果が出たようだ。夏課題等の提出率は90%であった。来年度も現指導方針を油断無く継続することで基礎基本の学力の維持と向上に努めたい。 | B |
| | | 地歴・公民科 | 生徒が主体的・対話的に取り組める授業を展開するとともに、基礎基本の充実を図るため、ICTを用いるなど適切な工夫を各授業ごとに行う。 | 授業プリントの理解度に関する生徒の自己評価は肯定的意見が90%以上、定期考査時の課題提出率が80%以上、定期考査の学年平均60点程度である。ICTを用いた授業を年5回以上おこなう。 | 1年授業プリントの理解度に関する生徒の自己評価は肯定的意見が89.7%。1年課題提出率は1学期中間79.2%、1学期期末65.7%。1年考査素点平均は中間70.5点、期末56.2点。1年は毎回の授業で教員用chromebookカメラを使い教材を教室のスクリーンに映すとともに同じ画像をmeet配信することで後席の席の生徒も見やすく、1学期中にGISを活用する授業を2回行うなどICTを用いた。2年課題提出率は1学期95.6%、2年考査素点平均は中間54.8点、期末55.1点。3年考査素点平均は中間62.7点、期末51.5点。2～3年のその他項目もほぼ同様であり、おおむね目標を達成した。 | A | 授業プリントの理解度に関する生徒の自己評価の肯定的意見が90%以上、定期考査時の課題提出率が80%以上、定期考査の学年平均60点程度、ICTを用いた授業を年5回以上、すべて数値上で上回る事ができた。 | A |
| | | 数学 | 家庭学習による基礎・基本の定着を図る。ICTを活用した課題の出題方法などを各教科担任で工夫し、提出の徹底とその評価を図る。 | 小テストなどで学習の定着状況を確認し、定期考査においては基礎的な思考力を問う計算問題がほぼ全員解答できるようにする。課題提出率が各クラス90%以上を目指す。かつその内容を効果的に評価できるように工夫する。 | 1学期の課題提出状況を見ると、80～85%程度にとどまっており、夏休み課題についても90%には届きそうにない。各学年とも特定の何人かの生徒について課題が提出出来ず、個別の指導が今後とも必要である。各教科担任ごとに、放課後の個別指導や考査前の補習などで対応しているが、考査の結果からは基礎力の定着にはまだまだである。 | B | 定期考査前の対策課題などを通して、これだけは全員正解してほしい問題を繰り返し指導し、さらに希望者に放課後の補習を行うなどして、ある程度の基本事項の定着が進んでいる生徒が増え来ている一方で、課題を提出しない生徒については、補習にも参加せずなかなか指導が行き届いていない。提出状況も9割に届かないクラスもいくつか有り、担任との連携を今後とも続けて、個別の指導も含めて対策の必要がある。 | B |
| | | 理科 | 実験を通して、科学的思考力を身につける。ICTを活用し、基礎基本事項の定着を図る。 | 実験レポートを、生徒全員がていねいに完成する。定期考査では、基礎基本の問題が全員できる。 | 課題や授業プリントは、ほぼ全員の生徒が提出している。ICTを積極的に活用することで、授業でできない実験を考察したり、身近な理科についての調べ学習を行っている。 | A | 実験を通し、科学的思考力を身につける事ができた。就職や進学に向けた基礎学力定着に取り組むことができた。 | A |
| | | 外国語科 | 学びに向かう力を育成し、個別の力に合わせた学習を進められるよう、ITを効果的に活用し、基礎基本の定着と高度学習の習慣づけをする。異文化理解と積極的にコミュニケーションを図る態度を育成する。 | 科によってばらつきはあるが、単語テストで、クラス全体の6割以上の生徒が6割以上の得点率である。G12英語Dゾーンとの割合が毎年増加する傾向にあるが、減少することを自覚とする。また、海外の人と積極的に交流しようと思う生徒の割合が全体の15%になることを目指す。 | アンケートによって「海外の人と積極的に交流しようと思う質問に①そう思う＝10.3%、④どちらかと言えばそう思う＝28.1%(合わせて約4割)。全体の15%以上という目標を大きく超える事ができた。一方で小テストで6割の生徒が6割の点数を超える。には3年生の1学期の結果以外は届きそうにない。Dゾーンの生徒の割合を意欲しつ、引き続き生徒の興味関心を高める授業を目指したい。 | B | DMM英会話アプリの活用により、個別最適な学びを実現することが出来、生徒一人一人が外国人講師へのインタビューを通してプレゼンテーションを展開するという連の授業、評価が実現した。外国人との会話に「抵抗を感じる」生徒が71%から37%に減少し、次のレッスンを楽しみにする生徒が増加。グローバルの視点から、主体的・対話的で深い学びが実現され、生徒の達成感・成就感が増した。 | A |
| | | 保健体育科 | (保健)積極的にICTを活用し、主体的・対話的な授業作りを進める。(体育)1学年次では基礎基本の定着を図るような内容を重視し、2・3年では主体的な活動として取り組む態度を育成する。 | (保健)SDGsの観点で課題学習において、各科の教科横断的な学習を進め、発表を通して主体的な活動ができる。 | 2年生2学期からの取り組みであるが、5科との協力を依頼している。1学期においては、発表の準備としてグループディスカッションやディベート活動を通して主体的に意見を述べる練習をした。 | B | 専門科に協力をいただき、保健授業で教科横断学習を進めることができた。無理のない範囲で専門科の授業に保健の内容を組み込んでもらったり、科を超えて生徒対応してくださったり、TTの授業であったり、柔軟かつ効果的に展開できた。生徒のアンケートでは、教科横断について理解が高まったが多く、体育科としては一定の成果を得られたと思う。 | A |
| | | 家庭科 | ICT教材を効果的に活用し、SDGsの視点を意識させた学習を進める。実習をきめ、常に授業準備をして授業にのぞませ、学習した内容を各家庭で実践しようとする態度を育てる。 | 授業準備物を忘れる生徒がなく、作品や実習のまとめなどの提出物の提出率が90%以上、課題等を通して学習内容を実生活に結びつけて考えることができる生徒の割合を80%以上とする。 | 大半の生徒は授業開始前に準備が整い、着席している。毎時間ごとに回収するワークシートはほぼ90%以上の提出率であるが、週末課題等については、意識が低く60%程度にとどまっている。ICTも課題の提出や確認テスト等で活用している。夏季課題として実生活での取り組みを課し、それが生活を直直さすきっかけになることを期待している。 | B | 前半はワークシートを含めた課題の提出状況も90%付近であったが、後半になるに従いクラス間で授業への取り組み姿勢や意欲に差が生じ、安定しているクラスでは講義・実習に積極的に取り組み、ワークシートや作品の完成度も高い一方、意欲の乏しいクラスは60～70%程度にとどまった。題材の精選や、グループ学習など学びの工夫により生徒が家庭生活に興味・関心をもてるよう工夫し、また、効果的なICTの活用事例等も収集していきたい。 | B |
| | | 機械科 | Chromebookを使用する環境下で座学や実習で学習を行う。座学はICT教材を準備し、知識の習得に活用し成果を上げる。SDGsの気付きは工業の各科目で取り上げる。 | 学習活動を意欲的に行う生徒が増えるよう、家庭や学校で専門知識を身につけられるよう工夫し、ICTが有効に活用できるようにする。 | 実習科目でのICTの活用もやっている。実習などの取り組みをICTで準備することはできても作業手順など実際の作業はまだ取り組めていない。実習は試行錯誤をしながら対応していきたい。 | B | 座学はもとより実習指導などでもICTの活用は増えている。ChromeBookを活用しての学習はどの科目でも実施できるようにしている。次年度に向けさらに取り組んでいきたい。 | B |
| | | 電気科 | ICT機器を積極的に活用し、分かりやすい授業展開をおこなう。PBL基礎(2年)PBL応用・課題研究(3年)を通して主体的に学ぶ態度を育成する。 | 授業内容の理解度が向上する。自ら仮説を立て解決に向けた方策を考えることができる。 | ICT機器を実習や座学において積極的に使用し、わかりやすい授業を心掛けた。自ら考える生徒の割合が増加している。 | B | PBL実習や座学、実習において、生徒のクロームブックを使った調べ学習や調べ学習、プレゼンテーションを行うことができた。非常に有効活用できたと思う。教員もICT機器を座学・実習で積極的に使用している。さらに生徒が生き生きと発表できる環境づくりに向け動いているところである。 | A |
| | | 工業化学科 | ICT機器を積極的に活用し、わかりやすく興味・関心を持って授業の展開を心がける。 | 学習意欲が向上し、学ぶ喜びを実感させ、活気がある授業を行う。資格取得の昨年以上の合格率を目指す。 | ICT機器を積極的に使用し、わかりやすく理解度が上がる授業に心掛けた。実習においても結果の提出など活用した。 | B | ICT機器を積極的に活用し、わかりやすく理解度が上がる授業に心掛けた。また、資格取得も積極的に挑戦した。課題提出も提出率も上がり意欲が感じられるようになった。来年度も継続して資格取得等、支援していきたい。 | A |
| | | 電子機械科 | 各種検定や資格取得を奨励し、Chromebookを活用しながら自主的に学習する態度を習慣づける。ものづくりを通じSDGsについて考えさせる。 | 全員受験の検定の合格者数増加を目指す。Chromebookなど活用を通じ、ICTを上手く使いこなせるようになる。 | ICTを積極的に活用し、座学で動画を用いた説明や調べ学習、実習ではレポートの提出などに利用している。全員受験の資格については、GIDE計算技術検定が95.0%(増加)だった。R3ABの機械製図検定は40.2%(微増)であった。 | B | 授業では科の大半の先生方がICT教材を用い、chromebookを活用している。教材資料や参考動画を提示し生徒への理解を深めている。実習ではレポート提出も一部オンラインで提出させている。芸術鑑賞の日は担当の先生がリモートで授業を行った。コロナ以降生徒の気質が変わり、レポート提出が滞る生徒がいる。継続指導が必要である。 | B |
| 設備システム科 | 日々の授業や資格取得に対する学びの環境を整える。 | 生徒全員が全科目単位修得し、1人1つ以上の資格を取得する。 | ICT機器を積極的に使用し、分ける授業の展開に心掛けている。資格取得に向けての取組も活発的である。 | A | 分かる授業に向けてICTを活用した学習指導は定着してきた。また、資格取得への挑戦も昨年度より増加しているの、学習に取り組む姿勢も向上してきた。来年度は今年度以上に受験者数を増やしたい。 | A | | |
| 1年団 | Chromebookを導入し、学習活動を効率化し、より深い理解につなげ基礎学力の向上を図る。 | 授業を大切にし、学習意欲を育成し、ICT機器の活用場面が増加する。 | ChromebookやICT機器を利用し、わかる授業の実践に約り組んでいる。 | B | 学年としては、ChromebookやICT機器を利用し授業を大切に、学習意欲を育成できた。しかし、後半赤点を取る生徒や、欠席が増える傾向が出てきた。 | B | | |
| 2年団 | Chromebookの活用をを広げ、学力の習慣化を促し、基礎学力の定着を図る。 | Google Workspaseの活用方法を教員が共有し、生徒の学力の定着を図る。 | 授業や学習計画にChromebookを活用して学習指導に役立っている。 | B | 授業や学習計画にChromebookを活用、「2年多目的教室」と称したクラスルームを活用して、学習指導に役立っている。 | B | | |
| 3年団 | SPI対策として月曜7限を有効に活用するとともに、学習環境を整え、授業の理解度を向上させる。 | 授業力の向上を図り、資格取得・検定に積極的に挑戦させる。 | Chromebookを可能な限り授業に使用して、授業向上に努めている。 | B | 3年生は一学期末で月7でSPI演習を集中的に取り組む、就職選考試験に備えた。Chromebookを活用して授業力の向上をすることができた。 | B | | |
| ものづくり教育 | ①安心・安全な学習環境を整備し、5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)運動を徹底する。 ②先端技術等を取り入れたものづくりの教育を推進する。 ③スーパーエンパイロメントハイスクール事業(アクアポニックス)を推進する。 ④実習・課題研究等の内容を工夫し、専門性を高め、魅力づくりを推進する。 | 機械科 | 5Sの徹底を行い、軽微なケガの発生率を減少できるよう取り組む。 | 2、3年生は実習機会が多いが、ケガ等に注意した実習の取組みが出来る。 | 環境の整理整頓や実習での清掃など常に心掛けて取り組んでいる。 | B | 実習の初めや終わりの環境整備はできているが、作業中は乱雑になることもあるため引き続き注意を行ってきたい。 | B |
| | | 電気科 | 資格取得やものづくりコンテスト等への積極的な参加を呼びかける。 | ものづくりコンテストで上位入賞。また、次年度以降に向けて先輩から後輩への技術指導ができています。 | ものづくりコンテスト県大会(電気工部門)出場。高校生ロボット競技コンテスト岡山県大会優勝。10月に栃木県でおこなわれる全国大会に出場。 | A | ものづくりコンテスト県大会(電気工部門)出場。高校生ロボット競技コンテスト岡山県大会優勝。10月に栃木県でおこなわれる全国大会に出場。 | A |
| | | 工業化学科 | 5S運動を徹底的に行い、安全教育の重要性を理解させ、事故発生0を目指す。アクアポニックスの研究を進めていく。 | HR・実習教室等で、始業時に学習環境状況に意識を持たせ、5Sの確認のもとで授業を開始する。アクアポニックスの各科連携を取りながら進めていく。 | アクアポニックス3年目を迎え、エンパイロメントハイスクール事業も本年度から始まり、5科連携の元、連携を取りながら行っている。 | B | アクアポニックスも各科との連携を取りながら行っている。問題面もあつたが解決に向けて理解を深めた。また、外部の発表会にも参加し、生徒たちの実力も付いてきた。来年度も継続していきたい。 | A |
| | | 電子機械科 | ものづくりコンテストや各種大会に参加する。資格取得を推奨する。SEH事業助成を受け、アクアポニックスを推進する。 | ものづくりコンテストの県大会上位入賞を狙う。各種大会で全国大会に出場。電気工事士や各種検定の取得を通じ知識や技術を深める。アクアポニックスでは循環が上手に機能し、収穫を目指す。 | ものづくりコンテストの電子回路製作部門に出場。仁科ロボコン 優勝(独創賞) アクアポニックスもいよいよ大型魚飼育の水槽を準備し、9月から稚魚を飼育予定。バナナは結果し着実に成果を上げている。岡山理科大学と連携し、TV取材や他校、企業の視察も関心を高めており、取り組む生徒のモチベーションも高まっている。 | A | ものづくりコンテストの電子回路製作部門の県大会に出場、旋盤部門にも出場予定。仁科ロボコン 優勝(独創賞) ジャパンマイコンカーラリー 中国大会cameraCias優勝、全国大会出場予定(1月) 第22回せろんカー大会出場予定。アクアポニックス、バナナ結果収穫あり。大型魚タカイの飼育開始。モクスガニ飼育諸挑戦。TVマスコミなどの取材を多く受け、生徒がインタビューに応じるなど、生徒自身もやりがいを感じ成長している。 | A |
| | | 設備システム科 | 安全指導・安全点検および5S運動を徹底し、授業事故0を目指し、学習環境を整える。 | 学習環境が整い、機械や道具の不備による授業事故が0となる。 | 具体的計画を実施することによって、現在までのところ大きな事故なく授業ができていますので、今後も継続していきたい。 | A | 安全指導や安全点検および5S運動により、大きな事故や機械の故障などもなく、よりよい学習環境が構築できた。来年度も継続していきたい。 | A |

今年度の取組目標 「よさを認め、一人一人が生き生きと学ぶ学校づくり」

| 学校経営目標 | 具体的計画 | 担当分掌 | 各分掌による具体的計画 | 今年度の達成内容・基準 ※達成基準をできるだけ数値化してください(できれば現状も) | 中間達成状況と評価 | | 最終達成状況と評価 | | |
|-----------|--|-------------|---|---|--|--|---|--|---|
| | | | | | 達成状況(9月30日現在) | 評価 | 達成状況※評価の根拠もできるだけお示しください。 | 評価 | |
| 豊かな人間性の育成 | ①挨拶、身だしなみ、言葉遣い等、社会人として求められる礼儀を身につけさせる。 ②部活動・生徒会活動への積極的な参加を通して心身の育成や豊かな人間性を育てる。 ③生徒の自治活動を推進し、自主性や他を認め思いやる心を育成する。 ④職業人としての誇りと規範意識を持ち、粘り強く取り組む人間力を養う。 | 生徒課(生活指導) | 授業前後や部活動、挨拶運動を通して指導・実践していく。また教職員から生徒に積極的に挨拶を実践していく。 | "挨拶ができています"という実感を教員・生徒・保護者が持っている。(学校評価アンケートなどで、80%以上の肯定) | 日頃から挨拶・声かけ・校門指導でのあいさつなど積極的に実施できている。2学期からはPTA役員による挨拶を計画している。 | B | 日頃から積極的に挨拶をするように声かけを行った。また、生徒会による朝のあいさつ運動を実施した。2学期からはあいさつ運動でPTA役員にも参加をしていただいた。しかしながら、生徒自ら積極的に挨拶するには至らなかった。習慣化するよう工夫が必要である。 | B | |
| | | 生徒課(特別活動) | 部活動の充実。SDGsへ向けた取り組み。(講演会、広報活動等) | 1年生全員入部。年度末にSDGsに関するアンケートの収集を行い、全員がSDGsに関して理解できるようになる。 | 全員入部を目標とするが、生徒個人の事情により達成はできていない。SDGsへ向けた取り組みは、生徒会を中心に進めている。 | B | 全員入部は、個人の事情により達成はできなかった。東工祭では安全管理に努めけがや事故がなく終えることができた。 | B | |
| | | 教育相談課(人権教育) | 講演会・ワークショップなどを通して、生徒の人権意識の深化をはかる。 | 講演後の感想文において、アンケートの記述欄で4行以上書いた生徒が80%以上である。 | 1年生対象の講演会「ネット社会の見えない危険性」では「修行」がキーワードとなり、自己改革への意欲を生徒に持たせることに効果があった。2年生対象の人権教育LHR「心のストレスとその対処法」では、自殺予防の啓蒙という目的を達成することができた。3年生対象の「就職差別と統一応募書類」の学習では、就職活動時に留意すべき事柄についての知識を蓄えることができた。 | B | (左記追加)10月15日の人権教育教員研修では、バラスーツを通して、「ノーマライゼーションの理念」の一層の理解を進めることができた。(課題)来年度は、高教研人権部会長校となるので、重責を全うしなければならない。 | B | |
| | | 学年団 | 1年団 | 挨拶の動行を中心にて、基本的な生活習慣を確立して、校則や社会のルールを守る。 | 元気のよい挨拶ができ、ルールを守り周囲を協力して学校生活を送れる。 | 校内研修、集会、授業等あらゆる機会に挨拶や集団行動におけるルールの必要性など指導している。 | B | 校内研修、集会、授業等あらゆる機会に挨拶や集団行動におけるルールの必要性など指導している。地域貢献活動にも多くの1年生が参加をし自己肯定感を育成できた。 | B |
| | | | 2年団 | 時間厳守を徹底し、気持ちの良い挨拶の習慣化を目指す。 | ホームルーム・授業・集会などが時間厳守で行われ、様々な場面で挨拶ができる。 | 学校生活アンケートの結果や特別指導の状況をもとに、学年団で規範意識の徹底といじめの防止についての体制づくりを進めた。 | B | 学期初めや行事などの機会に、挨拶や規範意識の徹底と仲間意識の醸成をはかり、学校生活を安定的に過ごす基盤をつくることができた。 | B |
| 3年団 | 自分から挨拶をする、時間を守る、身だしなみを整えるなど、集団でのルールを遵守させる。 | | 粘り強く繰り返し指導する。 | 社会人になることに向けて、ホームルームや学年集会で繰り返し指導をしている。 | B | 学年団や各担任の指導のおかげで無事に3年間を終えようとしている。卒業に向けて頭髮服装の継続的な指導を行う。 | B | | |
| キャリア教育 | ①キャリア教育・職場体験教育(企業見学・インターンシップ・社会人講師等)を推進する。 ②進学や就職試験に向けた全体的な協力体制を推進し、進路決定率100%の実現を目指す。 ③全学年を通した体系的なキャリア教育の充実を図り、自らの進路決定を支援する。 ④進学・就職試験に対応できる力(SPI検査・作文・面接等)や技能(資格取得等)を身につけさせる。 | 進路指導課 | 進路指導戦略の打ち出し | 本校の強みを生かした進路実現ができるようになる。前年度実績(就職)194人(72%)[進学他]77(28%) | 3年[就職]180人(68%)[進学他]84(32%) 本校の強みを理解した進路選択をしているものと推察する。 | B | [3年※1]就職69%進学31%[2年※2]就職69%進学16%[1年※2]就職71%進学23% (※1:実績 ※2:希望調査) 本校の強みを理解した進路選択をしているものと推察する。 <課題>就職希望者の増加と教職希望者の確保 | B | |
| | | キャリア教育研究委員会 | 担任および進路指導課と連携をとり、インターンシップを計画し、職業観や進路意識の向上を図る。 | 職業観が身に付き、次年度の進路実現に向けての準備が整う。 | 夏休みに実施したインターンシップでは、39社70名の生徒が参加し、職業観を身に付ける貴重な体験ができた。来年度に控えている進路実現に向けて活かせるよう、9月にはインターンシップの報告会を予定している。 | B | 夏休みに実施したインターンシップでは、39社70名の生徒が参加し、職業観を身に付ける貴重な体験ができた。さらに年度末までに、11社20名を加えて、合計50社90名のインターンシップを行った。9月にはインターンシップの報告会を行った。 | B | |
| | | 資格推進部 | 外部講師や先輩先生による指導の充実を図る。具体的には溶接技能者による実技指導やマスター派遣制度の有効活用。 | 資格取得での指導をしていただく。年間15回程度の外部講師による溶接指導。 | 溶接技術指導においては年間16回のペースで順調に指導いただいている。 | B | 計画通り外部講師の方にご指導いただき、一定の成果が得られている。将来の進路決定の参考にもなっており有意義である。 | A | |
| | | 学年団 | 1年団 | 進路指導のLHRや講演などを通して、自分自身を見つめる時間を作り、進路選択の意識を持たせる。 | 基礎学力検査やSPI検査などを通して、自分の実力を知り、将来に向けて月曜7限を利用する。 | 進路活動のLHRや社会人講師の講義などを通して、自分の進路を考えるきっかけ活動を行っている。 | B | 進路選択のため、企業から就職担当者を招き講演を戴いたり、校外学習なども行い考えるきっかけを作ることができた。 | B |
| | | | 2年団 | 生徒一人一人が進路実現に向けて、進路選択ができるように段階に合わせて指導する。 | 企業見学、インターンシップを通して、生徒自らが企業についての情報収集ができる。 | インターンシップ、企業見学に参加して次年度の進路選択に向けて体験や情報収集ができた。 | B | インターンシップ、企業見学に参加して次年度の進路選択に向けて体験や情報収集ができた。 | B |
| 3年団 | 進路希望に応じた学力の定着を図り、進路実現の指導を行う。 | | 一人ひとりの進路希望を実現するための就職指導及び進学指導の充実を図る。 | 積極的な保護者と生徒と面談を行い、進路実現に向けて指導することができた。 | B | 生徒一人ひとりが希望した進路決定ができるように指導することができた。また、受験中の生徒がいるので最後までサポートする。 | B | | |
| 地域連携による教育 | ①中学校訪問や出前授業等の充実を図り、学校情報を積極的に発信する。 ②学校説明会や見学会、体験入学などを積極的に行い、中学生や保護者に本校の魅力を伝える。 ③ものづくり教育の技術を活用した地域貢献活動を通じて、生徒の自己有用感を醸成する。 ④発表活動の機会を設定し、プレゼンテーション能力を育成するとともに、地域に積極的に公開する。 | 総務課 | ・オープンスクールの実施形態ミニ体験を中心としたものに変更し、積極的に学校の魅力を発信する。 ・中学校訪問や出前授業を積極的に行う。 | ・オープンスクールの体験活動がミニ体験を中心としたものに変更できている。 ・中学校訪問や出前授業をおこなった結果、定員が充足する。 | 8月3日に夏オープンスクール(東工フェス)を実施した。26種類のミニ体験や企業セミナー、進路説明等、従来の形式とは大きく変えて実施することができた。中学2、3年生十保護者で合計988名の来校があった。次年度以降も同様の形式で実施していきたい。 | B | 8月3日に夏オープンスクール(東工フェス)、10月12日に秋オープンスクール、ナイトガイダンスを実施した。特に夏オープンスクールは従来の形式とは大きく変えて実施することができた。中学校等の説明会に計10回参加し、本校について伝えることができた。しかし、説明会の効果については検証が必要である。次年度メリハリをつけた参加を検討する。 | A | |
| | | グローバル人材育成 | 外部機関と連携を図り、工業科での学びを活かしながら生徒が外国人と英語を使って活動する。 | 年に2回以上、講演会または地域の外国人とものづくり等を通じた交流会を実施する。そのうち1回はオンラインで海外と交流する機会を設ける。 | 7月の「海外事業所とのオンライン交流会」では、ベトナムに事業所を持つ企業と交流し、生徒の視野が大きく広がった良い機会となった。7月のイベントでのグループ分けと同じメンバーで、12月の「ものづくりinEnglish」に向けても、引き続き生徒の海外や英語に関する興味関心を広げていける活動を目指す。 | B | ものづくりinEnglishは8年をかけて工業科5科それぞれに1年ずつ担当してもらい良い節目となった。毎年60名以上の希望者を集めることが出来、グローバルマインドを育成する活動を通して、アンケートにおいてはすべての項目について上昇。トップは「私は外国人とコミュニケーションをとることができる」という項目で0.55%程度の上昇。 | A | |
| | | 生徒課(地域貢献) | 町内会や東岡山駅周辺に地域貢献し、保護者や地域から信頼される学校づくりに取り組む。 | 地域貢献活動を通じて、地域住民の信頼が得ることができる。 | 町内会と意見を交換しながら、清掃や清掃活動を計画し行っている。 | A | 年3回の地域清掃に生徒が自主的に参加し、学校行事として定着している。また町内会の要望を聞きつつ周辺地域の清掃活動を月に1度のペースで実施した。次年度は清掃以外の地域貢献も検討する。 | A | |
| | | 専門科 | 機械科 | 夏季休業中に中学校教員に向けた技術講習会、小・中学校での出前講座を計画し交流を図る。 | 小中学生だけでなく、中学校教員向けにも案内し、工業高校の魅力を発信する。 | 1学期から夏季休業にかけては磐製中学校、高島公民館、わくわくEスクール(中国電力)の参加を行った。秋には角山小学校を計画している。中学校教員向けの案内をしたが、希望がなかったため中止。 | A | 今年度は外部への出前講座を多く行うことができた。増えすぎずと教員や生徒の負担が増えるため、来年度も考えながら行っていきたい。 | A |
| | | | 電気科 | 出前教室への参加。今後も持続可能な出前講座のテーマ研究。 | 今後も持続可能な出前講座のテーマが設定できている。 | 山南学園、磐製中学校で出前授業をおこなった。LEDライトや紙飛行機など持続可能なテーマについて研究を進めている。 | A | 出前授業やオープンスクールを含め、今年度は、生徒を中心にやることができた。また、外部の発表会など参加し生徒たちの自信にもつなげることができた。 | A |
| | | | 工業化学科 | 小・中学校の出前講座や発表会に積極的に取り組み、生徒に積極的に参加させる機会を増やす。 | 参加させる機会を増やすことによって、生徒のプレゼン・コミュニケーション能力等を育てる。 | 出前授業・オープンスクール等に多くの生徒が積極的に参加し、主体的に活動してくれた。 | A | 出前授業・オープンスクールなど、今年度は、生徒を中心にやることができた。また、外部の発表会など参加し生徒たちの自信にもつなげることができた。来年度も生徒が自発的に動ける機会を増やして経験を積ませてやりたい。 | A |
| | | | 電子機械科 | 出前講座、夏休みの科学教室などにボランティア参加し、ものづくりの楽しさを教える。 | 出前講座や、公民館などの主催の科学教室にボランティア参加し小学生にもものづくり体験指導を通して人として成長し、社会人基礎力を涵養する。 | オープンスクールではミニ体験を7テーマと全科の中で最も多く実施し、見学者も大勢来場した。また、来室者に科のチラシを配付しPRを行った。出前講座では、角山小学校出前講座、高島公民館でのイベントに参加し小学生にもものづくりの楽しさを体験させ、本校生徒の成長に繋がった。また、科単独での行事を極力WPIに投稿し、科のPRを積極的に行っている。入試の応募状況好転に期待したい。 | A | 出前講座 角山小学校(6月)、邑久中学校(12月) 高島公民館キッズ☆チャレンジ2024(7月) いずれも「モータを作ろう」オープンスクールはR科は7ショップ出展、一番出展数が多かった。生徒も意欲的に取り組み、多数の生徒保護者の参加があった。また、ポスターセッションは、課題研究全10班、プレゼンを行ったアクアボニックス班まで実施。生徒が自ら積極的に説明を行った。 | A |
| 設備システム科 | 関係部署と連携を取り、本科の生徒を対外的な場へ参加させ、学校および学科の情報発信をしていきたい。 | | 参加することによってプレゼンテーション力や対応力が向上し、人材育成へとつながり学校評価も上がる。 | オープンスクールでは2年生が全員参加し、中学生や保護者の方に対して発表活動ができた。2学期以降は、このような場面が増えると思うのでプレゼンテーション能力を上げていきたい。 | B | 校内外を問わず発表活動の場が増え、状況に応じた発言や対応・行動が徐々に実践できるようになり成果を上げた。来年度は対外的な場へより多く出て行きたい。 | A | | |

今年度の取組目標 「よさを認め、一人一人が生き生きと学ぶ学校づくり」

| 学校経営目標 | 具体的計画 | 担当分掌 | 各分掌による具体的計画 | 今年度の達成内容・基準 ※達成基準をできるだけ数値化してください(できれば現状も) | | 中間達成状況と評価 達成状況(9月30日現在) | | 最終達成状況と評価 達成状況※評価の根拠もできるだけお示しください。 | |
|---------------|--|------------------------------|---|--|---|--|--|---|----|
| | | | | | | | 評価 | | 評価 |
| 校内組織の活性化と人材育成 | <p>①業務の効率化を推進し、教職員が心身共に健康で、明るく、活気に満ちた職場環境づくりを目指す。</p> <p>②学科、学年団、各分掌の連携を強化し、全校一丸となった指導体制で教育活動にあたる。</p> <p>③OJTによる人材育成・授業改善・技術の伝承を推進する。</p> <p>④生徒指導と教育相談が一体となった指導のあり方について研修を行い、生徒の支援体制を構築する。</p> | OJT研修チーム | 中堅教諭等資質向上研修対象者を中心として解決すべき学校課題に対して、各自の実践に基づいた対応や解決について校内研修を適時に計画し、実践していく。 | 中堅教諭等資質向上研修対象者に若手育成を意識した校内研修を年間2回以上実施している。 | 年間計画に従って、中堅研修対象者による校内研修が行われており、各自の授業や分掌に関する実践に基づく内容をチーム内で研究協議できている。 | B | 計画した8回の研修を行い、中堅研修対象者を中心にICT活用や実践的な授業研究を中心とした具体的なテーマで研修をすすめる、知識や情報を共有することができた。 | B | |
| | | 専門科 | 機械科 | 若い先生に新たな科目の取組みを与え、問題点を探りながらベテランの先生の指導が受けられるように授業を割り振り、TTも含め指導に当たる。 | 温故知新の考えを基に基礎基本の理解を深める学習の共有が出来ている。 | 若手教員の持ち授業を考え、授業研究ができるようにしている。年間を通して技術の伝承をしていきたい。 | B | 授業の持ち時間が多く中、各自工夫をして授業研究を行った。来年度も自主的に授業研究ができるような授業の割り振りを行いたい。 | B |
| | | | 電気科 | 対話と尊重により、良い人間関係を構築。経験の長短にかかわらず、お互いを尊重し学びあう。 | 明るく、楽しい職場になっている。次年度以降の実習内容について検討ができています。 | 実習の資料作成を進め、引き継ぎ可能な実習内容について検討を進めている。PBL演習では、教員同士意見を出しながらルーブリックの作成に取り組んでいる。 | A | 実習の資料作成を進め、引き継ぎ可能な実習内容について検討を進めている。PBL演習では、2年次と3年次の受け渡しをテーマに教員同士意見を出しながら、キーとなる2年次3学期のアイデアを出している。 | A |
| | | | 工業化学科 | 教員間の連携をとり、より良い教育活動の展開と技術を享受する。 | 情報の共有化と共通理解の引継ぎと技術の継承 | 教員間の情報共有化を心掛け、度重なる科会を計画し共通理解を図り、業務の効率化と働き甲斐のある職場の環境作りを心がけた。 | B | 教員間の情報共有化を心掛け、度重なる科会を計画し共通理解を図った。業務の効率化と働き甲斐のある職場の環境作りを心がけた。来年度も、働き甲斐がある職場環境を作っていきたい。 | A |
| | | | 電子機械科 | ベテランの先生と若い先生とで授業や実習を担当して技術の伝承を図る。実習等の資料を整理し、OnLine配信を促進する。 | ベテランの先生とペアを組むことで若い先生が技術を習得できる。実習等の資料を見直し、PDF化してChromebookで配信するなど、印刷の省力化とICT利用促進ができる。 | 教育課程や社会のニーズに合わせて、実習等の内容の見直しを行い、ものづくりやプログラミング教育に力を入れている。また、課題研究などで若手とベテラン教員とで同じテーマを分担して受け持つなど技術伝承もしている。 | B | 教育課程や社会のニーズに合わせて、実習等の内容の見直しを行い、内容も更新した。ものづくりやプログラミング教育を充実させ、担当者が変わっても対応できるように実習内容を見直し、テキストを作成している。また、電気系部会など各種講習会等にも積極的に参加したり、新たな分野を開拓するチャレンジ精神に溢れ、活気づいている。 | A |
| | | | 設備システム科 | 可能な範囲で体験機会を持ち、互いに学びの姿勢で活気あふれる学科を目指す。 | 情報共有と学び合いにより、指導の幅が広がり同僚性も構築され、働きやすい職場となる。 | 教員間の情報共有を引き続き行い、指導の幅を広げ生徒へ還元していきたい。まとまってきた技術研修は実施できていない。 | B | 指導力向上に向けて学び合いや情報共有などはできたものの、対外的な研修や体験活動に参加できず残念であった。来年度は対外的な研修へ積極的に参加していきたい。 | B |
| | | 教務課 | ・通知票の郵送方法を見直すことで、教員負担の軽減を図る。 ・授業参観期間を設けることで、他者の授業を見学しやすい環境を作る。 | ・通知票に係わる業務の延べ時間(50時間)を大幅に減少できた。 ・授業参観期間を2回以上設けた。 | ・通知票の郵送を廃止することが決定した。今後はスムーズに運用できるように調整する。 ・参観授業を1回設けた。2学期中にもう1回設けたい。 | B | ・通知票に係わる業務の延べ時間(80時間以上)に減少できた。 担任の袋詰め1時間×21クラス×3回=63時間 教務課の郵送手続き2時間×3回=6時間 事務処理4時間×3回=12時間 合計81時間 3回とは、2学期中間・期末、学年末の3回 ・参観授業を2回設けた。 (課題) 授業参観へ積極的に参加してもらえような声かけ | A | |
| | | 総務課 | 学校行事・オープンスクール・PTA行事・広報などの業務内容を見直し精選する。 | 業務のスリム化の実現と、課内で情報共有できている。 | ・中学校説明に複数の先生に行って頂いた。複数の先生が説明を実施できることで、業務の平準化と内容のブラッシュアップができた。 ・次年度に向けてスクールガイド、広報誌など作り方、配布の仕方について再検討をおこなっている。 | B | ・オープンスクールの決定通知を廃止した。これにより名簿の処理、確認、郵送準備等、約10時間の業務削減ができ、その時間を計画・運営にあてることになった。 ・中学校説明会に複数の先生に行って頂いた。複数の先生が説明を実施できることで、業務の平準化と内容のブラッシュアップができた。 ・総務課の業務について棚卸をおこなった。次年度業務の効率化に向けて活用していく必要がある。 | B | |
| | | 管理厚生課 | 保健・購買・安全管理・奨学金・厚生各担当が中心となって業務行い、効率を図る。 | 保健・購買・安全管理・奨学金・厚生で情報を共有し活動する。 | 保健・購買・安全管理・奨学金・厚生それぞれ、責任をもって活動できている。 | A | ・清掃や身の回りの環境を整えることにより、落ち着いた学習環境が保たれている。 ・昼食時、食堂の見回りを行うことで、落ち着いて食堂の利用ができています。 ・奨学金の受付が、スムーズにできています。 | A | |
| | | 生徒課 | 課内の係だけでなく、互いに分担・協力して運営する。 | 個々による業務の偏りがない。 | 生徒指導においては、担任、学年、専門科と連携してあたっていく体制作りをしている。行事によって担当者には負担が偏っている。 | B | 生徒指導が起こった時に組織的に対応できる体制づくりを文書化するなど工夫をしている。まだ定着するには時間がかかると思うが今後も継続していく。 | B | |
| | | 進路指導課 | 内容や手順の周知による業務のユニバーサル化を図る。 | 特定の人間ではなく、誰でもできる業務にする。 | 校内行事等は良い意味でルーティン化されつつある。対外調整等はまだ経験によるところが大きい。 | B | 校内行事等は良い意味でルーティン化されつつある。人事マナーメントによる影響が大きい。 <課題> 中長期的な進路人材育成 | B | |
| | | 図書課 | ・配付資料を精選し、chromebookを活用した業務内容の共有と業務の遂行を図る。 ・生徒指導、教育相談に関する資料・情報の提供やレファレンスにより、支援構築をサポートする。 | ・生徒と教員間、また教員間での情報共有が効果的になり、各係が連携協力し課題解決にあたることにも業務内容が整理され引き継ぎしやすい状況になっている。 ・県立図書館からの相互貸借により、1学期に1度資料の更新を行った。 | ・各行事などを含め、業務内容に関わる図書課教員や図書委員への連絡について、chromebookを活用し業務内容の円滑な共有と遂行を達成できている。 ・担任からの相談を受け、1学期は県立図書館からの相互貸借のテーマを不登校とし資料の更新を行った。 | B | ・chromebookを有効に活用することで業務内容の円滑な共有と遂行を達成できた。 ・県立図書館の相互貸借も利用し生徒指導や教育相談に関する情報の提供や支援構築のサポートをした。 | A | |
| | | 教育相談課 | 各業務のリーダーを中心にチームで業務遂行する体制を強化する。各所と連携しながら、支援が必要な生徒への関わり方等について情報発信し、教職員間で共通理解を図る。 | ・各リーダーの指示のもと担当者が責任をもって業務を遂行し、次年度以降の引継ぎも考慮して資料等を共有フォルダで整理する。 ・1学期に1回以上、支援が必要な生徒への関わり方について、掲示板等に情報を発信する。 | ・各業務のリーダーの指示のもと、担当者たちが協力して業務を遂行した。複雑なケースの場合は、その都度、関係者で集まったり、外部機関と連携を取ったりして、機を逃さない対応に努めた。 ・生徒の欠席が続く場合の対応について、職員会議で資料を示し、共有を図った。 | B | 生徒課、進路指導課等と連携し、特別な教育的支援が必要な生徒に対する支援体制を整えることができた。学年主任に定期面談、長期欠席調査、ケース会議等に参加してもらったり、SC・SSW・通級面談等の記録を管理職、科長をはじめとした関係職員で共有し、生徒の共通理解と問題への迅速な対応が可能となった。また必要に応じて、外部機関や支援学校と連携し、専門家による助言をもとに支援できた。 | A | |
| | | 情報管理部 | 教員間での連携を図り、保守管理業務を円滑に遂行する。 | 三年生が一人一台端末体制となることで、頻発すると予想されるデバイスの故障に迅速に対応する。 | 全校で週に二回ほどの故障が発生している。各科の担当者が故障機への対応にあっており、迅速に修理会社へ引き継いでいる。 | B | 一人一台端末について、故障修理は1ヶ月から3ヶ月を要する。故障対応の体制や代替機の利用可否を見直す必要がある。各家庭から直接業者と連絡が取れるよう検討したい。 | B | |
| | | 資格推進部 | 科の枠にとらわれない資格指導。専門性を生かしたコストに対するリターンの最大化を目指す。 | 各科における専門性を活かした指導方法の伝承や資料の活用。資格取得の級と時期を決める。 | 各専門科・教科の特徴を生かした資格取得・検定への取り組みがなされている。 | B | 各専門科・教科の特徴を生かした資格取得・検定への取り組みがなされている。 | B | |
| 管理職 | 若手教員に対する研修を実施し、プレゼン力の育成を目指す。 | 職員会議等で輪番による発表の場(6回)を企画・運営する。 | コンプライアンス研修等において3回の発表の場を企画運営することができた。 | B | コンプライアンス研修等において7回の発表の場を企画運営することができた。探究的学びを深められる教員研修を企画、運営することができた。来年度においては、より若手教員の発表の場、機会を増やしていきたい。 | A | | | |